

大内秀明『ウィリアム・モリスのマルクス主義—アーツ&クラフツ運動を支えた思想』(2012、平凡社新書)を読む Ⅱ

報告者：半田 正樹

第三章 モリスの社会主義論—共同体主義への道

【社会主義三部作】 (pp. 120-126)

○論稿「社会主義—その根源から」(1886年5/15~1888年5/19「コモンウィール」連載)

○物語「ユートピアだより」(1890年1月11日~10月4日「コモンウィール」連載)

○『社会主義—その成長および成果』1893年

*モリスが自らの社会主義思想に基づきユートピア世界の物語として描いたのが「ユートピアだより」であり、その執筆動機となったのがE. ベラミー『顧みれば』。

◆『顧みれば』: ベラミーが、1888年に刊行した、20世紀のボストンを舞台とする「社会主義」の「夢物語」。機械文明が頂点まで達した官僚主義に基づく〈国家社会主義〉。

『ユートピアだより』点描 (=モリスの社会主義イメージ) (pp. 129-144)

- ・家事労働の「見直し」(→いわば男女共同参画事業的発想)
- ・教育の「自由教育」への転換
- ・都市と農村の対立の変化(都会人と田園人の同化)
- ・近代国民国家の廃絶
- ・私有財産制度の廃棄
- ・「労働の報酬」は「生きることそのものであり、創造の喜び」
- ・「近代社会の商業主義的隷属制から自由の時代への」変革の原動力は「自由と平等」への憧れ
- ・商業主義的体制の付属物であり、体制の警察の付属物であった19世紀の科学の一掃
- ・人間労働の必要不可欠な生産対象が「かつては美術品」と呼ばれたものへ
- ・機械は芸術作品を作り出すことはできない・・・、我々は手工芸の秘訣を習得してしまっ
て、自由な空想と想像力に極度に洗練された技術を加味した・・・
- ・利便性や大量輸送の鉄道の時代は過去のものとなり、昔ながらの水門が利用され「自然エネルギー」の水車が様々な目的に使われている

『ユートピアだより』の原タイトル”News from Nowhere”の和訳について (pp. 144-148)

◇1904年堺利彦の抄訳では「理想郷」

◇1925年布施延雄の全訳では「無何有郷だより」

◇1929年村山勇三訳では「無何有郷通信記」

⇒ Nowhereを「無何有郷」と訳すのは、現世の「此岸」に対する「彼岸」の意味が入るといふ点でやや宗教的色彩が強まる。

👉 (論点①) 『無何有郷』という訳語は、宗教的意味合いを感じさせるが、モリスの共同体社会主義における宗教の位置、その役割から考えれば、さらに日本的知的土壌からすれば、宗教的色彩を込めることに意味があるように感じます」(p. 146)、と説明している問題。

➡モリスが自らを無神論者と自称していたといわれている点もあるが(島貫悟「ウィリアム・モリスの宗教理解 ―キリスト教思想と社会主義の統合―」(『ヨーロッパ研究』No. 14, 2020/03))、もともと「無何有郷」は、荘子の『応帝王篇』にあるタームであり、何物も存在しない広々とした世界のことを指し、「理想郷」を意味することから、「宗教的色彩」とは一線を画すというべき。

死に際してのマルクス、モリスとエンゲルスの差異 (pp. 148-151)

◇マルクスとモリスは、宗教的形式を受容したが、エンゲルスは一切拒否した。

→ マルクス、モリスは墓地に眠り、エンゲルスは海への散骨を選択した。

モリスの〈社会主義〉への射程 (pp. 152-158)

モリス(たち)は、ユートピストと自称したが、ユートピアとは現実から遊離した、単なる夢物語＝幻想の謂いではなく、「現実を改革して理想に近づける、そして〈理想郷〉を実現する」という意味合いが込められていた点に注目すべきであり、総じてエンゲルスが「空想的社会主義」と蔑視したことを再検討する必要がある。モリスはマルクスに習いつつ、〈恐慌＝革命テーゼ〉を超えた『資本論』の純粹資本主義の法則を学んで、自らの社会主義の主張を科学的に基礎づけようとした。

モリスの〈共同体社会主義〉 (p. 165)

モリスは、社会主義の運動家・実践家としての側面も示したが、その点で注目されるのは、モリス流の国際労働運動の紹介・分析である。例えば、アメリカ初の労働組合のナショナルセンター「労働の騎士団」は、自営業や生産者協同組合の立場から、労働者の賃金制度の廃止をめざす社会主義運動であったが、これに焦点をあてていたということは、共同体を重視するモリスを象徴している。

モリスの「労働者階級」論 (pp. 166-169)

労働者階級は、一見革命への前進に向かうかのように見えるが、それは「社会主義者」としてではなく、「社会主義に向かって伸びていく本能」によって行動する人々のあり方とでもいうべきものにすぎない。そこで必要なことは、新しい社会の理念が、労働者大衆の目に絶えず確保されることである。

モリスの「理想」に向けた「永続的変革」論 (pp. 170-172)

◇分権や自治の強化、現政府による郡や教会区の形成を準備する法案は、重要なステップになる。民主的な機関の提供が、社会主義の目的に将来利用できる。

◇近代国家の官僚制は、国際的には連邦制により死滅させるべきであり、地方的には分権自治の強化で、政治的國家の外堀を埋めるべき。

⇒国家権力への参加や介入、利用ではなく「國家の死滅」を軸とする考え。

◇モリスは、革命の形については、武装闘争や権力的な上からの革命ではなく、下からの大衆の永続的意識変革を重視した。

👉 (論点②) いわば地方主権、近代國家の相対化というモリスの考えは、拙論「地域循環型社会」の基本的視座に通底するとも考えられるが、いかにモリス説を「評価」しつつ、さらなる発展につなぐことができるか。

モリス社会主義論の総括 (pp. 172-174)

◇モリスは、新しい社会の基礎を「自由と共同コーポレーション (⇒協同組合)」ととらえた。國家 (=近代國民國家) の「死滅」については、移行期には「連邦化されたコミュニティの体制が國家にとって代わるものになる。」その上で、モリスはいう。

👉 (論点③) 以下の文章 (p. 175) をいかに解説するか。

『読者は、政治的には新しい組織をコミュニティの組織体としてイメージしてほしい。それはそれぞれの事情で運営されるが、しかし代表者の共和制で結ばれている。その機能は、社会の洗練された原則を維持するであろう。それは〈教区の小区画 town ship〉もしくはコミュニティと共和制という二つの権力からなり、両者の体制の間に二つの極があるわけで、一方は共和制の原則、他方は自然的な環境、たとえば言語、気象、地域区分などの共通性で結ばれている』つまり、国際関係としては世界的な共和制の連合、各国はコミュニティ連邦になります。

☞ちなみに、「訳書」(第21章)の当該箇所では、「移行期においては連邦制の原理が出てくるだろう。・・・この原理は二重の仕方で作用する。ひとつは地域に根ざしたかたちであり、地理的・地勢的な場所や言語により決定される。二つ目は産業と結びつくかたちであり、人びとの職業によって決定される。地勢的にはタウンシップを最小の単位とみなす。産業の面では商いや職業はクラフトギルドとある程度似たやり方で組織される。・・・他方、最高位の単位は社会化された世界における大評議会である。(訳書『社会主義』 pp. 214-215)

モリスの「コミュニティの内部構造」論 (=「共同体社会主義」論) (pp. 176-177)

◇共和制の単位としてのコミュニティ (town ship) は、政治的かつ行政的な事柄を最小限に抑えることを前提とする。そこでは社会の単位として個人を保障し、

その能力の発展や満足を得るための自由を可能な限り保障する。また、社会的な福祉や共存に不可欠な労働、贅沢品の処理、嫌悪される労働、機械による労働の代替、アートの役割りを検討する。機械を介した資本による生産支配、労働力の商品化による人間労働の物象化という「モノとモノの関係から」、人間と人間の主体的な協力による共同体の関係が再生されるという点についていえば、あらためて人間の倫理・道徳・宗教の役割が甦ることにつながる点、それといわば表裏の関係で市民法としての民法が制度的に廃棄され、刑法も「どんな社会にも起こりがちな個人の自然的・必然的な規制に」限定される点が注目すべきことになる。

モリスの危機論 (pp. 177-181)

◇マルクス・レーニン主義的な〈全般的危機論〉とは違い、経済的・政治的危機を見すえつつも、近代社会の〈文明的危機論〉として展開された。家族や地域の崩壊、倫理や道徳の腐敗・喪失、宗教の形骸化などに焦点を当てる危機論。それゆえ、あるべき社会(=社会主義社会)は、あくまでも下からの自由な教育を通じた自主的・主体的な努力による意識の変革と形成に基づくものとらえた。

モリスの「宗教論」・「倫理」観 (pp. 181-189)

◇共同体社会では、宗教と倫理が一体化しつつ、生活の規範として機能する。そこでは、自然と人間は一体であり、信仰対象も生物と非生物の区別はない。しかし、共同体間から市場経済が発達し、そこから商業主義と物質文明が発展すると状況は大きく変化する。自給自足による閉鎖的な共同体経済と共同体間の開放的な市場経済に二元化することに対応していわば〈二元的概念〉が成立する。人間と自然、個人と社会、精神と肉体などの分離と対立が生じる。宗教的な精神世界は、孤立した個人の心のなかの魂の救済へと封じ込められ、宗教的儀式も形式的なものになる。同時に、個人が共同体の外部に対して責任と義務を感じる倫理観が生まれる。

👉 (論点④) 市場経済に淵源する商業主義と物質文明の発展が、いわば「疎外された宗教」をもたらす、と解釈可能なモリスの宗教論について。

モリスの(新たな「家族」「労働」「芸術」)論 (pp. 190-192)

👉 この並びをどう解釈するか(論点⑤)

- ◇「家族」は、相互の好みや愛情の上に、双方の間の意思で決まる共同(association)である。
- ◇「労働」は、財産の相続制度も賃労働制度も廃止されることにより(土地自然の商品化・労働力の商品化の廃絶)、いわば労働の喜びが復権するもとの「労働」

となる。同時に、労働の喜びの表現は労働の芸術化へと集約される。

◇「芸術」は、〈大芸術〉と〈小芸術〉の区分に加えて、〈付加的（形容的）芸術〉と〈自存的（実質的）芸術〉の二分法を導入。その理解は、歴史的推移とともに〈自存的芸術〉が大きく発展したが、それが上層階級の楽しみになる一方で、生活にかかわる〈付加的芸術〉すなわち〈小芸術〉が本来の意味を失った。商業主義が労働者のためのすべての芸術を奪った。

👉（論点⑥）「〈大芸術〉は独立の絵画、彫刻などの作品を含め、「職人の技の作品」（p. 191）という解釈についての妥当性。

モリスの「都市論」（あるいは「都市と田園の対立」の解消論）（pp. 193-194）

◇モリスは、過密問題を抱える「都市」の諸機能（行政的機能・金融機能・知識集約的機能 etc.）の分散化を通じた「都市と田園の間の矛盾の解消」をめざした。

第四章 現代に甦るモリスの〈共同体社会主義〉—東日本大震災と近代文明の大転換

一 近代文明批判の先駆者、モリスと宮澤賢治（pp. 196-203）

モリスは、近代工業化文明としての科学技術(Science & Technology)から技能芸術(Arts & Crafts)への脱皮と発展を、新しい文明の創造と考えていた。また、宮澤賢治は、いわば自然エネルギーで生きた(暮らした)人間といえる。それは、童話「月夜のでんしんばしら」で、電気エネルギーが軍事力となる心象風景を描いたことにみてとれる。

二 瓦礫の山と職人の復権（pp. 204-213）

東日本大震災は、東北の太平洋沿岸部に膨大な災害廃棄物(瓦礫)を残した。それは風雨にさらされ続けた放射能汚染の瓦礫でもあり、まさに戦後日本の高度経済成長、高度工業化を象徴するものであった。いいかえれば近代文明の転換を迫るものであり、モリスが近代社会の機械制大工業・重化学工業化による近代文明を批判したことと通底するものであった。

👉（論点⑦）一級プラント配管技能士・平井憲夫氏の〈「マニュアル化」の現実〉指摘(p. 213)の意味することを考えたい。

三 無縁社会を克服する〈共同体社会主義〉（pp. 216-233）

東日本大震災は、高度経済成長を象徴する「量産工業品」を瓦礫化したが、他方では高度経済成長によるもう一つの象徴「無縁社会」(都市化を通じた「血縁」「地縁」「社縁」の絆の切断)の現実を浮き彫りにした。

わたしたちが、いま、課題として向き合うべきは、モリスの〈ユートピア社会主義＝共同体社会主義〉や宮澤賢治の〈イーハトーブの世界〉の実現という、いわば 22

世紀に向けた人類の新たな文明社会の主体的創造にある。

そのポイントは以下の4点。

- (1) 高度工業化の基礎となってきた化石燃料および原子力エネルギーから再生可能エネルギーへの転換。
- (2) 工業化社会における大量生産-大量販売-大量消費から脱し、エネルギーを含む地産地消に基づく「地域循環型社会システム」の構築。
- (3) 過剰消費一体型のライフスタイルから質の向上に基づく芸術一体型生活の追求。そのための「労働の報酬は生きる喜び」への転換。
- (4) 家族・地域の〈絆〉を重視しつつ、「情報通信技術」共同体（スマート・コミュニティ）の構築。

👉（論点⑧）来るべき社会像の例解に「スマート・コミュニティ」を据える問題。さらに積極的に言えば、末尾におくポイントの整理に「労働力商品化の廃絶」の内容を入れるのは欠かせないのでは、という問題。